

平成三年十二月一日 (日) 郷土研究会資料

第一八七回 史跡めぐり

足利市・足利学校、鏝阿寺と館林市・茂林寺

越谷市郷土研究会

第一八七回 史跡めぐり案内

日時 平成三年十二月一日 (日)

集合 越谷駅東口前 午前八時五十分

(九時〇二分発太田行准急乗車)

行先 足利市・足利学校、鍔阿寺と館林市・茂林寺

コース 越谷駅→足利市駅→足利学校→鍔阿寺(昼食)→

足利市駅(上り十三時二十九分発)→茂林寺前駅  
→茂林寺→茂林寺前駅→越谷駅着

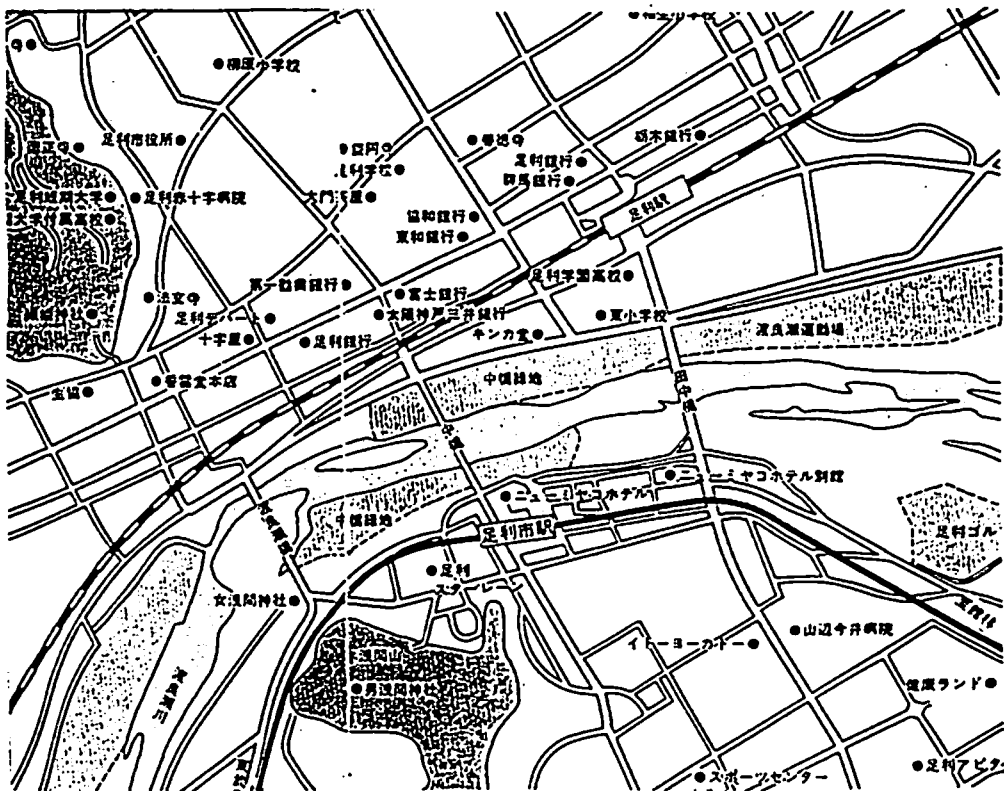
午後四時頃の前定

参加費 二、五〇〇円(交通費・拝観料・資料代など)

案内者 理事 鈴木秀俊

主催 越谷市郷土研究会

(足利市内地図)



栃木県の南西端に位置する商・工業都市。人口約十七万人。東は佐野市、北東を安蘇郡田沼町、南から西を群馬県に接している。大正十年、旧足利町が宇都宮市に次いで県下で二番目に市制を施行、足利市となる。昭和二六年から毛野村、山辺町、三重村、山前村、北郷村、名草村、富田村、矢場川村の一部、御厨町、坂西町を各々編入して、昭和三七年に今日の市域が確定した。

市域の北部は、足尾山地に属する山地帯だが、南部を南東に流れる渡良瀬川流域には、関東平野の北端にあたる平坦地が開ける。北部山地から小俣川、松田川、袋川、旗川などが流下し、南には矢場川が流れて、各々渡良瀬川に注いでいる。

市の開発の歴史は古く、県内でも最も早くから中央文化に接した所の一つとされる。市内各所に散在する古墳がそれを示し、「延喜式」や「続日本紀」にも、既に足利の地名が見える。

天喜年間（一〇五三〜五八）藤原秀郷七世の孫成行が、両崖山に足利城を築き、足利太夫と称してこの地を領したが、五代伝えた後平氏と共に滅びた。鎌倉期に入ると源義家を祖とする源姓足利氏の領地となったが、初代義兼は足利城に入らず、文治五年（一一八九）渡良瀬川の北岸に堀ノ内館（現鍔阿寺）を構えて入り、ここを本拠とした。義兼六世の孫が室町幕府を開いた足利尊氏である。

室町時代には、現在の中心市街付近は足利氏発祥の地として幕府直轄地とされたが、その中期以降は鎌倉権五郎景政を祖とする足利長尾氏の統治下におかれた。足利長尾氏初代の景人は、文正元年（一四六六）相模国高座郡長尾郷から足利荘地頭として入部、岩井山城（勸農町）を築いてその本拠とした。三代景長のとき足利古城を再興して移るが、四代憲長、五代政長と伝えた後、六代顕長の天正十八年（一五九〇）、小田原北条氏に与して豊臣秀吉に抗したため、滅亡している。

近世には、宇都宮藩の支族戸田氏一万一千石の陣屋が置かれ、機業地として発展、現在の中心市街の基礎が確立された。また市域南部の八木、梁田は日光例幣使街道の宿駅であり、奥戸・猿田は渡良瀬川舟運の河港となっ

ている。

明治三二年両毛線が開通すると県西部の機業・経済の中心地となり、同四〇年東武伊勢崎線の開通で首都東京と直結され、足利銘仙の産地として知られた。今も織維工業が市の中心産業となっている。

見所としては、足利学校、鍔阿寺、鶏足寺などの史跡と古刹、草雲美術館のある桜・ツツジの名所足利公園があり、市域中央北部の丘陵地一帯は足利県立自然公園に指定されている。

### 〔足利学校〕

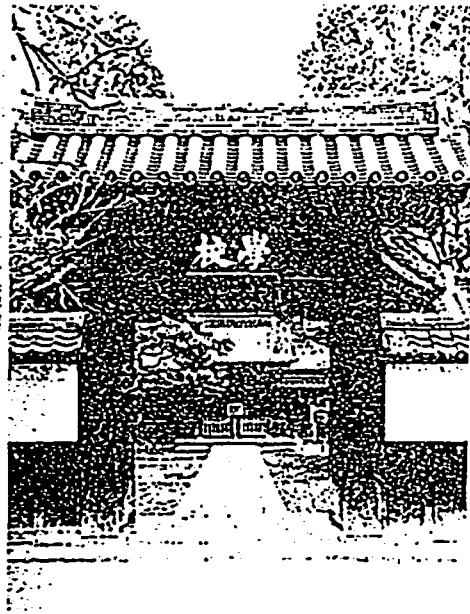
足利学校の創立については、古記録や伝承によると大宝令による「都に大学、地方に国学」の国学の遺制で、

その後、小野篁や足利義兼、上杉憲実等がそれぞれの時代に関与し、振興したと言われている。しかし、また前出の人々がそれぞれの時代に創建したという説もある。

学校は上杉憲実が関東管領になると、永享十一年（一四三九）に修理、学校領とともに諸国から求めた書籍を寄進、鏡倉五山の一つ円覚寺から僧快元を招いて初代の座主（校長）とし、長い間廃れていた学問の道を興して大いに学生を養成した。その後は代々僧をもって座主とした。憲実の子憲忠、子孫の憲房も書籍を納めて学校の基礎を固めた。

室町時代には儒学、特に易について学んだ僧が多く、天文年間（一五三二〜一五五四）第七世九華に至っては、学

▼ 足利学校跡





復原された足利学校

徒三千を収め、およそ三〇年にわたる在任中大いに発展した。第九世三要是、徳川家康の信任が厚く、書籍二百部余部と領地百石を賜った。寛文八年（一六六八）幕府により現在の聖廟（孔子廟）や学校門が改修され、その後も度々修理の手が加えられた。

宝暦四年（一七五四）雷火のため方丈や庫裡が焼失、古い歴史が不明になった。その後、安永、寛政、享和、文化、文政の時代に修理が行われた。また座主は將軍の運勢占いを幕府に献じ、民間人の学問や易占いにも応じたので、しきりに文人墨客が学校を訪れた。

維新後は、足利藩主戸田忠行が学校管理に当たり、藩学「求道館」を併合し、座主制度を改めて教頭、助教などを置き、藩の子弟や在地の人々を教育した。

明治五年、学校は蔵書とともに栃木県に引き継がれ、翌六年（一八七三）、元の校舎は小学校（昭和五七年四月に移転した市立東小学校の前身）になった。同九年、足利町民の願いにより土地、建物、蔵書などが県から返還され、明治十四年に学校保護委員を設置し、同三六<sup>年</sup>には遺跡図書

館が竣功した。大正十年足利学校跡約一万六千平方メートルと聖廟、学校門は国の史跡に指定された。

昭和五七年「史跡足利学校跡保存整備事業」に着手し、平成二年十二月、復原工事が完成した。聖廟の内陣に祀られてある木造孔子座像は、県指定有形文化財で、天文四年に作られたもの。像高七七・五七



段阿寺の山門

ンチメートル、厩巾二九センチメートルで全体に漆がかけられている。孔子像の右側にある小野篁坐像は、近世、足利学校が篁の創設だという伝説にちなんで祀ったといわれている。

前庭のナンバンハゼは大正十一年三月、林学博士白沢保美氏が孔子の出生地、中国山東省曲阜から移植したものの、県指定の天然記念物である。

※ 足利学校所蔵の、主な古文書類は次のとおり。

〔国宝〕宋刊周易注疏・宋刊尚書正義・宋刊礼記正義・宋刊文選

〔重文〕宋刊毛詩註疏・宋刊春秋左傳註疏・宋刊周礼・足利学校旧鈔本・宋刊唐書

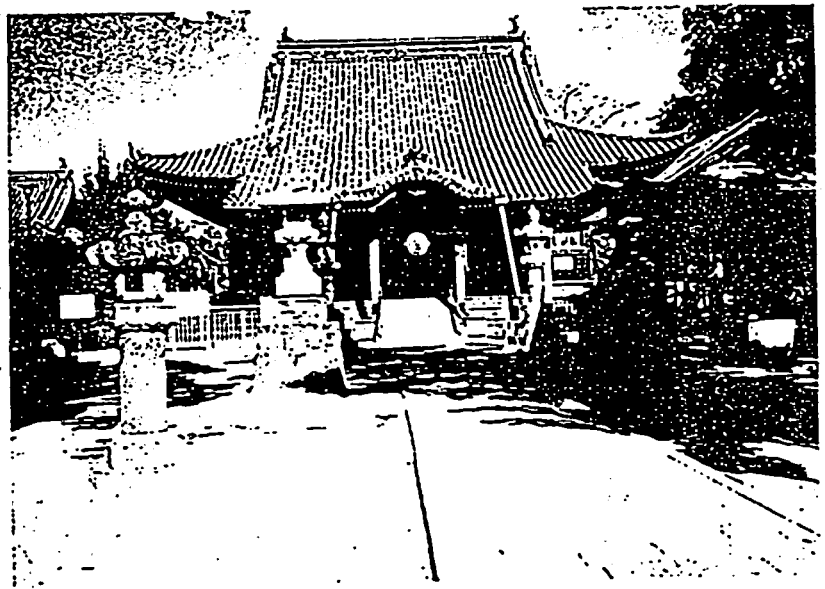
※ 復原された建物は、方丈・庫裡・書院という主屋と付属建物の土蔵・衆寮・木小屋・裏門と南北の庭園など。

#### 〔段阿寺〕（ばんなじ）

金剛山仁王院法華坊と号し、真言宗大日派総本山。本尊は大日如来を祀る。寺地は足利氏の居館跡で、面積は約四万平方メートル。ほぼ正方形をなし、四周に堀・土塁を残している。四面に門を構えて出入口とし、南の正面には反橋、他の三面は土橋を設けるなど、武士が勢力をもちはじめた頃の地方豪族の邸宅の構えをよく伝えており、大正十一年国の史跡に指定された。

館が設けられたのは平安末期で、源義家が下野守の時、その別荘として建てたのが始まりという。その子義国は初めてここに住み、義国の子義康が地名をとって足利を氏とし、昇殿を許され、その子義兼は八条院蔵人となった。

文治五年（一一八九）義兼は構内に持仏堂を建て、建久七年（一一九六）夫人の時子が死去すると剃髪して段阿と号し、持仏堂を段阿寺と改めて氏寺とした。これが当寺の起源である。



鏡阿寺の大御堂（本堂）

造立で、六メートルと四メートルの矩形建築。四方は二等辺三角形の木を井桁に組み、床を高くした校倉の珍しいもの。今は大黒天が安置されている。

以後は鏡倉・室町を通じて足利氏累代の氏寺として栄え、天正十八年（一五九〇）豊臣秀吉の足利攻めるとき山門を焼いたが、同十九年徳川家康が寺領六十石と一山境内五万坪を寄進して再興した。元禄年間（一六八八―一七〇四）には將軍徳川綱吉の母桂昌院が多宝塔を修営して金二百両を寄せるなど、近世を通じて徳川幕府の保護を受けて寺運は隆盛し、今に法灯を継いでいる。

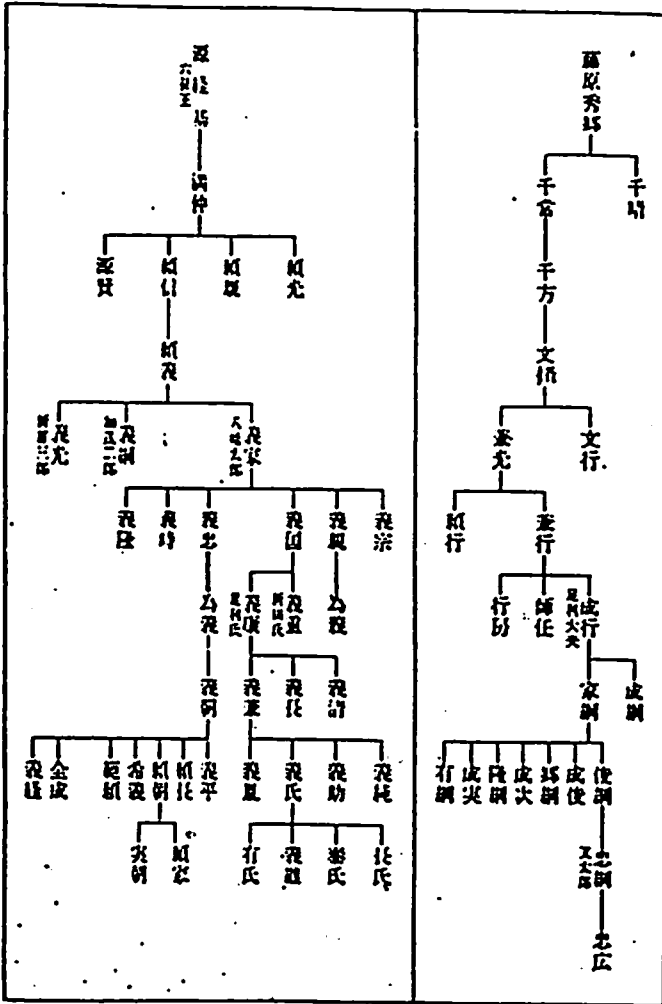
境内の大御堂（本堂）・鐘樓・多宝塔などの諸堂宇は、山門を除いて災禍を受けなかったため、寺の開基当初のものがそのまま伝えられている。うち大御堂・経堂・鐘樓は国指定の重要文化財で、樓門・東門・西門・多宝塔が県指定の有形文化財となっている。

大御堂は桁行五間、梁間五間、一重入母屋造り。文治五年（一一八九）の創立で、五回修繕が加えられているが、よく当初の姿を保っている。鐘樓は桁行三間、梁間二間の重層建築で、建久七年（一一九六）の造営。桁組に勝れた技術が窺える。

また中御堂と北側土塁のほぼ中間にある宝庫も建久七年の



寺宝類も多く、国指定の重要文化財の鏡阿寺文書や青磁香炉、  
 県指定文化財の銘家俊の大刀のほか、銘酒玉ノ井繁盛の圖、外国  
 船の圖などがある。とくに鏡阿寺文書は、関東地方における中世  
 史研究の貴重な史料になっている。



※治承・寿永の源平内乱の過程で、  
 藤原姓足利氏は源頼朝に敵対し、  
 寿永二年（一一八三）同盟軍の  
 常陸の志田義広が野木宮合戦で  
 敗北すると急速に没落し、俊綱  
 が家臣の桐生六郎に討たれて滅  
 亡した。（「吾妻鏡」養和元年  
 九月十三日条）  
 源姓足利氏の棟梁義兼は鎌倉  
 幕府の創設に協力して鎌倉御家  
 人となり、足利の地に確固たる  
 基盤を築いた。



◎字降松（かなふりまつ）の伝説

足利学校遺跡の、学校門を入ると正面に杏壇門があり、その中に聖廟（孔子廟）があります。この杏壇門の右手前にある枝振りの美しい松が「字降松」です。

足利学校が最も隆盛を極めたのは、七世庵主（しょうしゅう）九華の頃といわれています。今から四百余年前、いわゆる戦国時代ですが、その戦乱の中にもかかわらず、全国から教えを受けるために集まった生徒が三千人という記録が残っています。「字降松」の伝説もそのころのものです。

「難しい字だなあー。いったい何と読んだらいいんだろう」

学生寮の一室で自習していた一人の生徒が、こうつぶやきながら、しばらく頭を休めようと月の光に誘われるように庭に出ました。

「どうかしたのか」と、声をかけられて、振り向くと見回りの先生です。先程から、一人で勉強している姿を見ていたのでしよう。事情を聞くと、

「読めない字があったら、紙に書いてこの松の枝に結んでおきなさい。きっと読めるようになるから」と、謎のような言葉を残すと、講堂の方へ行ってしまう。

その生徒は、半信半疑ながら先生のいうとおり、半紙に読めない字を書いて松の枝に結びつけました。さて翌朝、目が覚めるとすぐ松の所へ行ってみました。するとどうでしょう。ちゃんとふり仮名が付いているではありませんか。

それ以来、わからない字があると、この松の木を利用したのでぐんぐん成績があがりました。これを聞いたほかの生徒が「それでは小生も」とまねをしたところ、これにも仮名が付いていました。

このことは、いつとはなくあちこちに伝わり、やがて近くの人々までが「私もぜひ」と松の世話になったりして、たいへんな評判になりました。

ある夜のこと、「いったい誰が仮名ふなをくれるのだろうか？」と好奇心にかられた一人の生徒が、こっそり寮を抜け出し物陰に身を潜めていました。

二時間近くも待ったでしょうか。一人の先生が松のそばに近寄ると、幾つも結ばれている紙の字に仮名を付け始めました。やがて雲間から出た月の光が、神々しいばかりのその姿を照らし出しました。

誰であろう、この人こそ七代目校長の九華和尚だったのです！

そして誰が名付けたともなく、この松を「字降松」と呼ぶようになりました。（足利の伝説より）

〔茂林寺〕 館林市堀江・茂林寺前駅から徒歩十分

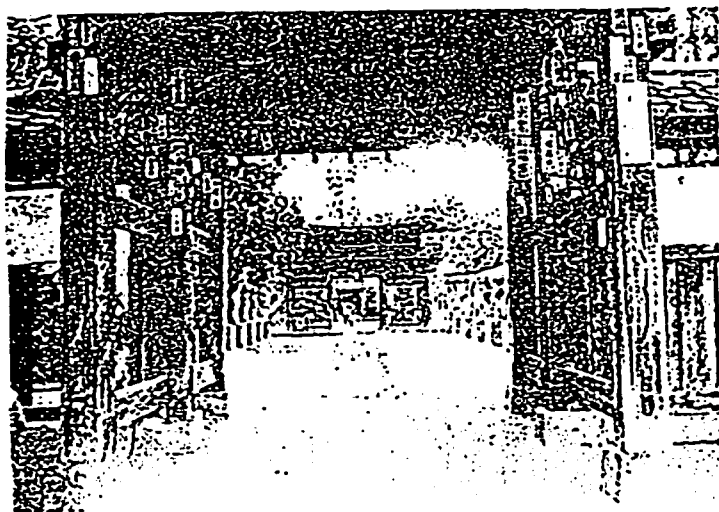
山号は青竜山。応仁年間（一四六七―六九）青柳城主赤井正光の開基、大林正通の開山と伝える曹洞宗の寺で、大永二年（一五二二）後柏原天皇の勅願寺となり、近世には朱印寺として栄えた。

分福茶釜の寺として有名だが、その伝えは、正通禪師が寺を開くとき、伊香保から守鶴という弟子を伴って来た。守鶴は長生きで代々の住職に仕え、第七世の月舟和尚の元龜元年（一五七〇）の夏、千人法会が開かれたことがあった。そのとき千人の僧に茶をたてるほどの大釜がなくて困りはてていると、守鶴がどこからか手頃な茶釜を見付けて来た。

その茶釜で湯を沸かしたところ、湯はいくら汲んでも尽きることなく、このとき守鶴が「この釜は多くの功德あり、なかでも福を分かつ」といったとかで、分福茶釜と名付けられた。

その後十世住職の天南和尚が、たまたま守鶴の眠っているところを見ると、それは歳千年を経たムジナであったという。正体を見破られた守鶴は寺を去ったが、茶釜は大切に保存され、今も寺宝として伝えられる茶釜がそれだとされている。明治天皇も県内行幸のさい、この茶釜を二度にわたって御覧になられたという。

寺域は広くて約三万平方メートル、堂宇は享保十三年（一七二八）建立の本堂・庫裡。元禄七年（一六七四）



に建てられた山門、応仁二年（一四六八）の造営という総門、守鶴を祀る弘化二年（一八四五）建立の守鶴堂などがある。

寺のすぐ北側の丘陵地には、総合レジャー施設の分福ヘルスセンターがあり観光客の訪れが多いが、古びた諸堂宇や境内に茂る老樹など伝説にふさわしい雰囲気はある。

また総門と茅葺きの山門の間の参道両側に、伝説にちなんで二十数体のタヌキ像がおかれてある。寺伝ではムジナのはずだがタヌキになっているのは、もともとムジナはアナグマの異称といわれ、館林地方ではタヌキをアナグマと混同してムジナという場合が多いため、狸塚と書いてムジナツカと呼ぶ地名もある。

境内には、童話「分福茶釜」を書いた巖谷小波の童謡碑もたてられてある。

#### 「茂林寺沼湿原」

茂林寺沼を中心に広がる湿原。コウホネ・ミスオオバコ・ノハナシヨウブ・エゾミソハギ・ミスオトギリなどの湿地植物が繁茂している。県指定天然記念物地域

#### 参考文献

- 郷土資料事典（観光と旅・栃木県） 人文社
- 郷土資料事典（観光と旅・群馬県） 人文社

